小鹿こども園

令和７年度　園評価

Ⅰ　経営の重点に関わること　評価段階Ａ：大変よくできたＢ：概ねよくできたＣ：あまりできていない　Ｄ：できていない

重点目標	評価指標	園評価	改善策（来年度の具体的な取組目標等）	園評価
夢中になってあそぶ	①環境設定 子どもの「夢中ゾーン」（あそびにのめりこんでいく様子）を見つけ、あそびを継続するための環境を整えている	子どもの興味関心を的確に捉え、その「つぶやき」に応じたあそびの展開をし、意図的に環境構成を行うなど、クラス単位での応答的な環境づくりには成果が見られた。また、子どもたちにとって安心してあそぶことのできる空間が確保され、丁寧に保育をみることができるようになった。 一方で、環境構成や玩具の見直しはしたものの、実践に活かすことができなかったこと、職員の考え方の違いが大きかったこと、園庭中央が有効に活用できなかったこと、乳児園庭の子どもの成長を見通した環境設定などに課題が残った。また、クラスの枠を越えた職員間の連携・共有においても課題がでている。 次年度は、クラス内にとどまらない密なコミュニケーションを図り、園全体が一丸となって「子どもが夢中になれる環境づくり」を組織的に追求していくことが必要になる。	1.「園庭プロジェクト」（環境の再構築） ・乳児・幼児担任が合同で、乳児園庭・芝生園庭の環境や玩具配置を見直す。 ・園庭の中央部分の有効活用 ・雲梯の位置、赤土の位置や量、築山の設置検討 2. 子どもの姿を読み取る力を高める ・年齢ごとの育ちを抑える ・３つの「みる」を意識した子どもの見取りをする ・ドキュメンテーションを使って子どもの夢中を可視化する ３．共有と振り返り ・５分間エピソードシェア：各クラス学年で毎日５分間子どもの様子を伝え合い、振り返りを行う ・週案の自己評価に話し合いから見えてきた子どもの姿や気づきを記入する ・各学年の子どもの姿や環境設定を職員会議で検討する ・子どもの面白い！楽しい！夢中！を近くにいる他の保育教諭と共有し、多様な視点を持つ ・関わりの振り返り：「あえて待った場面」や「介入して遊びが深まった場面」を共有し、年齢・発達に応じた適切な援助を検討する。	B
	②保育者の援助 子どもが自ら考え、あそびを深めるための関わりをしている	子どもの気持ちに寄り添いながら、必要なものを用意したり、声をかけたり、丁寧に関わろうと心がけていた。すぐに答えを出したり手伝ったりするのではなく、「まずは見守り、子ども自身に考えたり、試したりすることを多くの職員が意識し、実践できた。来年度に向けては、「先を見通した意図的な援助」や「関わるタイミングの見極め」が大切になってくる。		B
	③共有と振り返り 夢中になって遊ぶ姿を職員間で共有したり、保育を振り返る機会をつくったりして、自分の保育に活かすようにしている	クラス内や学年内における日常的な報告・共有は活発に行われており、それが子どもの理解を深め環境構成の改善に直結したという手応えが得られた。 一方で、職員間における経験の差や保育の考え方の違いが大きく、互いの保育観を深く語り合う機会の不足が課題として浮き彫りになった。		B

Ⅱ　施設の機能に関わること　評価段階Ａ：大変よくできたＢ：概ねよくできたＣ：あまりできていない　Ｄ：できていない

大項目	中項目	評価指標	園評価	改善策（来年度の具体的な取組目標等）	園評価
１ こども園における教育及び保育	(1) ０ 歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	「幼児期の終了までに育ってほしい１０の姿」を意識し、０歳児からの連続性を持った教育・保育を行っている	講師による接続についての研修をおこなったり、日案に「10の姿」の活用を行ったりして「幼児期の終了までに育ってほしい１０の姿」を意識しながら保育することができた。 一方で、学年ごとの保育が孤立しがちで、園全体としての連続性やクラス間での「期待するこどもの姿」の基準を合わせる難しさが課題。	日々のあそびや生活の中で「10 の姿」の視点で分析する習慣を定着させる。 個々の発達を尊重しつつ各学年の発達の特性を職員全体で学び直しを行い、クラス単位に留まらない一貫した教育・保育を園全体で追求していく。	B
	(2) 一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の子どもの実態や各家庭の状況を把握し、職員が共通理解のもと適切な援助を行っている	今年度は、クラス内での迅速な情報共有や家庭との丁寧な連携により、長時間滞在する児への配慮や、個々の生活リズムに合わせた応答的な援助を実践できた。他の職員と相談しながら保護者に寄り添う姿勢をもてた一方で、クラスによっては職員同士共有しているつもりでも解釈が異なっていたり、周知が不十分だったり、職員によって差がでる事もあった。	保護者に寄り添いながら、必要な支援を適宜行っていく 外部の専門機関とも積極的に連携を図り、より質の高い個別支援体制を整える。	B
	(3) 環境を通して行う教育及び保育	子どもの興味関心に応じ、主体的に遊びをすすめられるような環境を構成している	子どもの興味関心を丁寧に拾い上げ、遊びの展開に合わせて素材の提供や環境の変更を適宜行うことができた。行事においても保育者が主導するのではなく、子どもと一緒に作り上げるプロセスを重視し、主体性を引き出す関わりや環境構成に努めることができた。 一方で、環境を整えたものの、それが「遊びの深化」にまで繋がっていたかという点や、長時間の保育で遊びがマンネリ化してしまう点に課題が残った。また、環境構成が個々の担任の判断に頼りがちで、園全体で客観的に振り返り、工夫を共有する場が不足していた。	環境設定の意図や効果を職員間で積極的に共有し、多角的な視点で環境を見直すことで、遊びの質をさらに高められるようにする。	B
２ 安全管理・指導	事故防止・防災	職員同士連携を取りながら状況に応じた行動を取り、園児に対して	危険につながりそうな行動や箇所を発見した際、すぐに環境改善を行い、報告・相談・共有するサイクルを意識して行動できた。また、訓練の際、子どもと一緒に「何が大切か」「どう動くべきか」を振り返り、自分で身を守る意識を高	研修で得たことを活用して園全体の防災意識を改善していく。職員間の連携を密にしながら、子どもが発達に応じて自律的に考えて動けるよう、主体的な安全教育を継続していく。	B

		も自分で身を守れるような指導ができている	めることができた。一方で、専門研修で得た最新情報の園内共有が不十分で、危機感や知識に温度差が生じたことが課題。		
3 保健管理・指導	健康教育の充実	基本的生活習慣、衛生習慣が身につくよう、発達に合わせた指導や、食育活動を通して子ども達の食や健康への関心を広げていけるようにしている	手洗いうがいの習慣化や、年齢に応じた衣類の着脱・食事マナーの指導を継続し、子どもたちの基本的生活習慣の定着を感じることができた職員が多かった。また、野菜の栽培やクッキング、食材の色分けといった食育活動を通じ、子どもたちが食や健康に対して主体的に関心を持てるよう工夫を凝らすことができた。 一方で、保育者間の連携が十分でない場面があり、統一した指導や新たな取り組みを十分に深められなかったことが課題。	どの職員も、同じように年齢に応じた衣類の着脱・食事マナーの指導ができるようにし、子どもたちの基本的生活習慣の定着を目指す。	B
4 特別支援教育・保育	支援体制づくりの推進	一人一人の子どもの特性や成長を、職員間で共有し、子どもの姿に合わせた支援や環境の工夫がされている	子どもの特性や成長の記録に基づき、遊びの空間を分けたりタイムテーブルを調整したりするなど、一人ひとりの思いに寄り添った環境構成や支援に努めた。家庭や相談機関とも情報を丁寧に伝え合い、個々の「できること」や「伸びそうなところ」を職員間で共有しながら継続的な支援を行えた。 一方で、クラス内や、保育者によって関わり方に差が生じてしまう場面があり、園全体としての共通理解や一貫した対応に課題が残った。	どの保育者でも同じように適切な支援ができるよう、職員間での対話と共有の時間をさらに充実する。保護者との連携を深めるとともに、子どもが安心して過ごせる物理的な環境づくりにも注力し、園全体で支援体制の質を高めていく。	B
5 組織運営	組織体制の充実	責任を持って各分掌に取り組み、職員間で連携を取りながら、円滑な園運営につなげている	各職員が自身の分担業務に責任を持って取り組み、役割分担を通じて円滑な園運営に努めることができた。特に後半期には、自ら意識的に質問や相談を行うことで連携を図ろうとする姿勢が見られた。 一方で、他クラスや他学年との連携が不十分な場面や、気軽に相談しにくい環境、またチーム内での進捗確認や働きかけが不足していた。	職員間での認識を揃える対話を重視し、チーム全体の結束力を高める体制づくりに注力する。互いの業務状況を確認し合い、疑問や悩みを速やかに解消できる風通しの良い職場環境を構築することで、より組織的かつ円滑な園運営を目指す。	B
6 研　修	研修体制の充実	職員一人一人が公開保育や園内研修での学びを、	公開保育や園内研修を通じて自らの保育環境を見直す機会を持ち、得られた反省を実際の活動に反映させることができた。研修内で意見を述べる場を設けたことで、個々	研修では、誰もが和やかに意見を出し合い互いを高め合える「学びの場」へと再構築する。公開保育のあり方を見直すとともに、雇用形態や学年を問わず職員全体が納得	B

		日々の実践の中で活かし、重点目標の実現につなげている	の気づきを深められた。 一方で、研修の目的や意義が浸透しておらず、実施が「負担」と感じられたり、意見が出しにくいとの課題が残った。	感を持って学べる体制を整え、研修成果を確実な保育の質向上へと繋げる。	
7 教育・保育環境整備	教育・保育環境の充実	子どもの遊びが広がるよう、子どもの遊びに合った教材・素材を選んだり、提供の仕方や発信の仕方を考えたりしている	子どもの発達や発言に合わせて玩具の入れ替えや素材の提供を適宜行い、遊びの選択肢を広げることができた。環境設定の工夫により、子どもの「やりたい」という気持ちを捉えた応答的な環境づくりに努め、一定の成果を得られた。 一方で、日々の業務の中で環境構成や玩具の研究に充てる時間の確保が難しい事やクラス内での環境構成に対する認識のズレや職員間での十分な協議や発信の丁寧さが不足しているなど課題が残る。	研修での学びを活かし、自身の関わりを客観的に振り返る機会を設ける。そして、職員間で遊びの見通しを共有し、年間を通じて継続性のある豊かな保育環境を実現できるようにする。	B
8 家庭との連携・協力	家庭への支援機能の充実	子どもの姿や成長を、日々の会話やドキュメンテーションなどで発信し、参加会、面談等で共有することで、保護者と子どもの育ちを支える関係づくりに努めている	日々の会話やドキュメンテーションを通じて子どもの成長を具体的に発信し、保護者と共に育ちを喜び合える関係づくりに努めました。お迎え時のコミュニケーションや面談を大切にし、園と家庭の様子を相互に共有することで、個々の状況に応じた安心感のある支援を実践できた。 一方で、ドキュメンテーションの内容が単なる「その日の報告」や「写真付きお便り」に留まってしまい、深い育ちの記録に繋げられなかった点に課題が残った。	保護者の状況に応じた支援を意識し、より専門性の高い言葉選びや発信を心がけ、保護者と一丸となって子どもの育ちを支える連携体制を築いていく。 また、勉強会や研修を行いドキュメンテーションの質の向上を図る。 参観会への参加率の低迷、面談機会の逃しなど、働きかけのタイミングや手法など改善していく。	B